

●「SHINWA WALK〜伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、異土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

## SHINWA WALK 10

### 東海道の道標伝説

伝説  
そぞろ歩き

運命までは  
知る由もなし

行く先しめす  
みちしるべ

漣つくし



### 往時を偲ぶ東海道の道標

#### 今も残る江戸時代の面影

前回の「ほうろく地蔵」の地藏堂の道路を隔てた東側には、東海道に古くから建っていた道標が残っています。昔の東海道は現在の国道1号線の1本南に位置しており、伝馬町付近は、東海道が商店街として今も残っています。

往時を再現してみると、東海道を鳴海方面から西に進み、熱田宿に入ると、白本陣、脇本陣、間屋場、御朱印番所などがあり、突き当たった所が源太夫社（今の上知我麻神社）。その社前には高札場がありました。東海道と佐屋路・美濃路の分岐点でもあり、道標が建てられています。この道標は、佐屋路・美濃路の方へ右折する角（北側）、東海道を桑名宿の方へ左折する角（南側）に1本ずつ建てていたうちの南側のもの。寛政2年（1790年）に建てられたもので、1.4mほどの石柱。現在も元の位置のまま建っています。

北側の道標は、宝暦8年（1758年）に建てられたものですが、大正12年（1923年）に撤去され、30mほど東の現在地（村瀬家前）に移動されたものです。1mほどの石柱で、東の面から南の面にかけて欠損が甚だしく、すべてを読み取ることはできません。ちなみに、源太夫社は昭和20

年（1945年）に戦災で焼失し、同24年（1949年）に熱田神宮の正面参道第一鳥居の西側に遷され、元の場所には前回紹介した「ほうろく地蔵」の地藏堂が建てられています。

道標の前に立ち、人々が往き来う、江戸時代の東海道の賑わいに思いを馳せるのも一興です。ちなみに道標は陸だけでなく海の道にもあります。それが漣つくし。水路を示すために立てられた杭のことで。



### アリアドネの糸が道案内

#### 手繰りよせた悲運の未来

ギリシャ神話にも道案内にまつわる話があります。ミノタウロス退治で活躍するアリアドネの糸がそれ。ポセイドンに生けにえを捧げなかったせいで、クレタの王・ミノスに天罰が下ります。妻・パシパエ（太陽神ヘリオスの娘）が呪いをかけられ牡牛と交わり、怪物ミノタウロスが誕生したのです。

クノッス宮殿の迷宮に閉じ込められたミノタウロスを退治したのが、アテネの王子・テセウス。当時アテネの人々はミノス王から毎年生けにえを捧げるよう要求されていて、テセウスは生けにえの一人としてクレタ島へ行くことを志願します。その際、ミノス王の娘であるアリアドネ王女から見初められ、迷宮に入っていく時、剣と糸玉を手渡され、糸玉をほどこながら入っていくことをアドバイスされます。この糸がアリアドネの糸。テセウスは怪物・ミノタウロスが寝ている夜に迷宮に入り、ミノタウロスを退治することに成功。そして、アドバイスに従って帰り道に糸をたどって見事に迷宮から脱出します。

その後、二人はクレタ島からも出て逃避行しましたが、アリアドネを酒の神・デュオニソスのいるナクソス島に置き去りにします。テセウスを助けたのにもかかわらず、結局はテセウスに捨てられてしまったアリアドネですが、デュオニソスの妻となり、幸せに暮らしたといえます。

一方テセウスはアテネを出る時、父親であるアテネの王アイゲウスに「無事なら帰ってくる時白い帆を掲げましょう。黒い帆なら死んだものと思ってください」と約束してしま



▲ほうろく地蔵の前に建っている東海道の道標（南側）。

10th Letter



▲東海道の道標が残る旧道は今は商店街に。

たが、そのことをすっかり忘れていました。息子の帰りを一日千秋の思いで待っていたアイゲウス王はテセウスの船が黒い帆で帰ってくるのを見て、絶望のあまり断崖から身を投げて死んでしまいます。その海はアイゲウスに因んでエーゲ海と呼ばれるようになります。

テセウスとアリアドネは、運命の赤い糸では結ばれていませんでしたが、その後の二人の運命を大きく変えることとなったアリアドネの糸。テセウスが手繰りよせたのは、悲運の未来だったのかもしれませんが、そして、海上で船乗り水路を示す漣つくしも、旅人に行く先を指し示した東海道の道標も、人々の未来の運命までは知る由もなかったことでしょう。

※今回は、ほうろく地蔵に伝わる「布織女伝説」をお送りします。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rai ■取材・文/Icarus